

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

紀伊國名川圖

海士郡
三之卷下

ル4
1833
5



紀行圖會卷之三下

善導寺
崇谷觀音
宇佐八幡宮
姥櫻
住吉神社
和田千軒
極樂寺
南波神社
儀立浦
十輪寺
伽院寺
悠翁八幡
并財天社

梶取總持寺
崇谷御文
宗圓の松
左成社
稻荷神社
現通寺
堀月樓跡
八幡神社
春日神社
楊枝の牛
常行寺
迎ミ坊
春日神社

足宮八幡宮
北至の涉
浪巣院
北至の涉
松江後村貞
寂光院
名物系功餅

潮入橋
弓岡ふ

所化寮
大師色形
柳影



中村

内ル4
1833
5

新念寺

石院寺

光源寺

昆陽門堂

御所の井

八王子橋

新田旅店

石屋山

蓮華斗

現まよや

行者堂

古城跡

形見浦

形見山

和布魯圖

治神社

松濤堂

具沙門寺

友妹

地の小名

神鳴

立所額

造祖神

深瀬

観音講寺

能浦

八重子

山

小所七度濱

三十三間堂

圓光大師教化の圖

阿彌子

鬼子母神

御殿所

光明山善導寺

西山供物持寺に屬り

牛尊阿弥陀如來

座像

○般檀弥陀三尊御像

大日如來

大悲觀音

十一面觀音

○親鸞上人捨身像

自他不二

自他不二

自他不二

○鎮守天滿宮

天滿宮

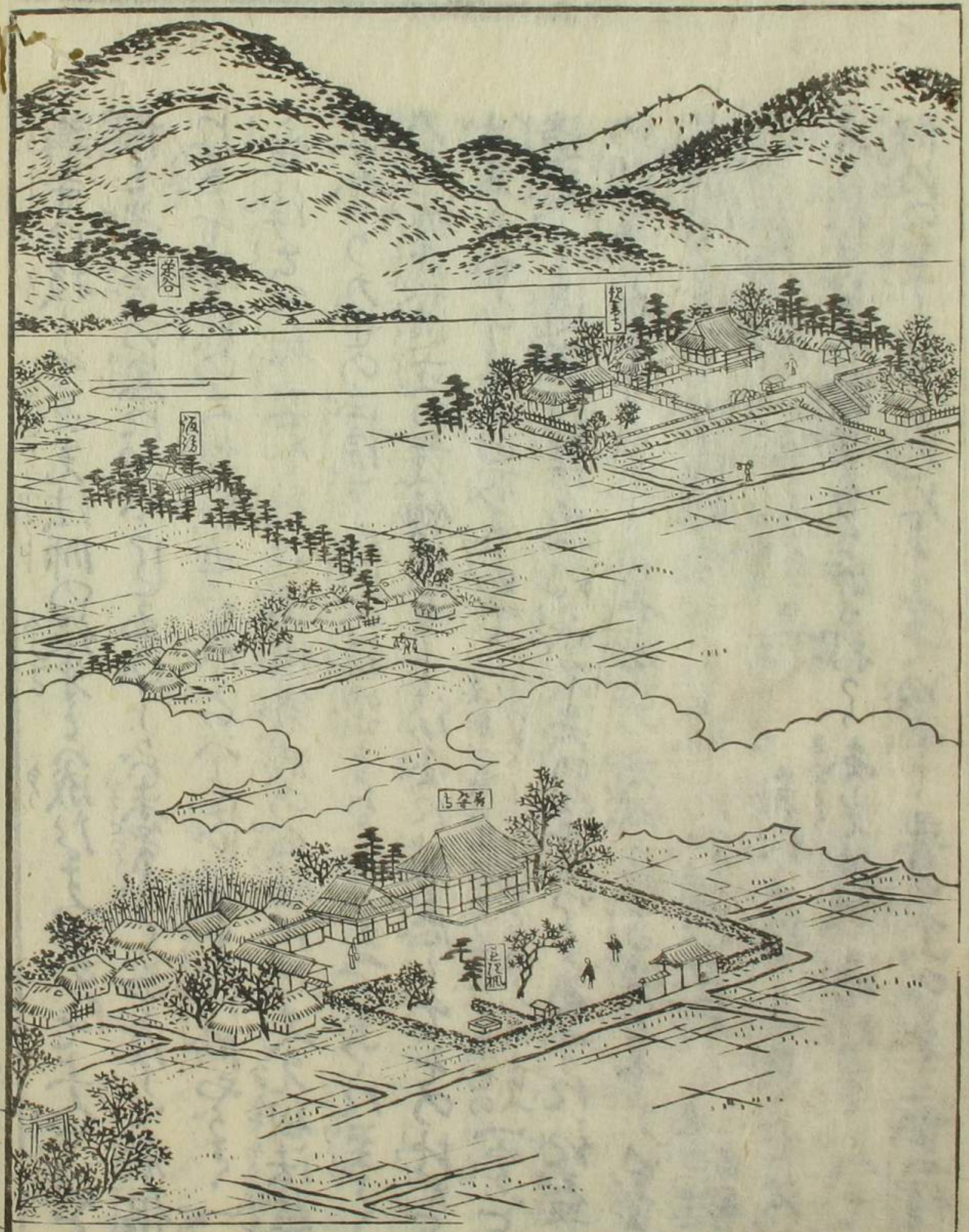
天滿宮

天滿宮

當山ノ皇一百代後國融天皇の時代承和四年妙寂光融上への昇基にて尚智寺門廣莫の大仏場ありて始祖上人の俗姓とあくまでも上聖圓のにて父の利根の名某とやうる英雄の士うち既に初老のころまでもい生と一子もられま婦相ともてこよながからもちみに親音大士より後てお念すに附るをゆきと後べ信者のうち特ひあるとげて母公たるおとたうてはおに

寅年五年の秋安覓端の男ふみうけぬきにわく父母
のほひ太りこすに唯掌中の珠のくみをひらくとあ
さくさく是上人の出世るう上人初みて凡あんせの
者の盡きにも食事頂礼して謹ふと必とくと通すの
がもきあう凡人寄黒とせざへあ あくふ父利根君を
文和四年京師の丸ふ然にて
三あ すくり母のむを巻ふうけはぬ九歳にありあひ
あ 丈君の大祥忌をまよ上人おときまつはるやも母
公よしの善挾と吊らんと出家が得道にあくへすと
ひきしれをあひうど母にあそてこまくひゆくあひび
かれとて室く年月を遙くて先階早くもやく
主ちく又や七廻忌とぞくと上人の素願遂切古今也康安
之年正歲二七月内玉帝妻郡山村ある普光山寺等

講寺に投して毘光法師の後身となり成なまうじと上人寸陰と
堵ミ雪の窓にひじゑひ一ぶ未矣とくあだて衆僧
にあて度教の大綱恵をぞととひ圓光法師やがく
奈津子の秘要を授け因頬佛戒の血脈はまくえ祖法然
上人トう九世の伝流西山門の株梁とくあう五うちに至く
乃ち仰益造立の慶願成り ひふに接歴してそのせと
あらうゆひうが山ふよみて
建造一造俗人集らるる承不失の後法とこゑやうに益
の利生かあうさう一うを近の美賀正まる城とちくい
の麻くぐてく星の持がごくふくに別院と象く 来院
利根庵 崇福寺 法華寺 本別院 教化する其うど
あらうだらう繁昌うりけりわく名光法師退居よろて
隠の空へをすくえにまよせてゆふ一普光山の宗ニ世ふ



ああひけう経よ云長元年三月廿九日法賜ハ十一ノ月
生生をそ送ふら其後持るの聞ム明秀光雲上人も
了び揚とせざりとくども往く起る高懸あくまで
御廢額にわざびよ天の兵少ふ右記什室よります
とて焼失ト今燒れなすりのもあくへ後くたつて
たゞ跡あめくわうそろちうとく

○什寶^{アラタナ}道大師^{アラタナ}印自筆のる^{アラタナ}

住吉神社^{スミヨシ}椎取村^{スミヨシ}在る不^{アリ}の神二座

勝^{マサニ}千代^{チヒロ}蛭鬼^{スジコ}一村の產神にて御

久^{クマ}每^{セイ}歲^{セイ}六^{ロク}月^{ツキ}晦^{カク}日

受陽山^{スルヤマ}如意院總持寺

梶原村^{カシワラ}にある深土^{シムヂ}西^シ流^リの櫻林七ヶ寺の共^{シテ}
金の乾^{カケル}を新^{ハタハタ}して是^{シテ}像^{シカ}内^{ナカ}御^{メシ}安^{スル}と

院^{イニ}を安^{スル}と幸^シの御^{メシ}と云^ハ白毫^{シロハス}佛^{ボク}舍^{サハ}利^リ八十^{ハシ}約^{ケタウ}て枝末^{ハシモ}合^{ハシモ}て二百八十^{ハシ}引^{ハシモ}あり

御^{メシ}嵌^{ハシマ}入^{ハシム}よ^ク七人立^{ハシム}像^{シカ}の阿弥^{アミ}陀^タ

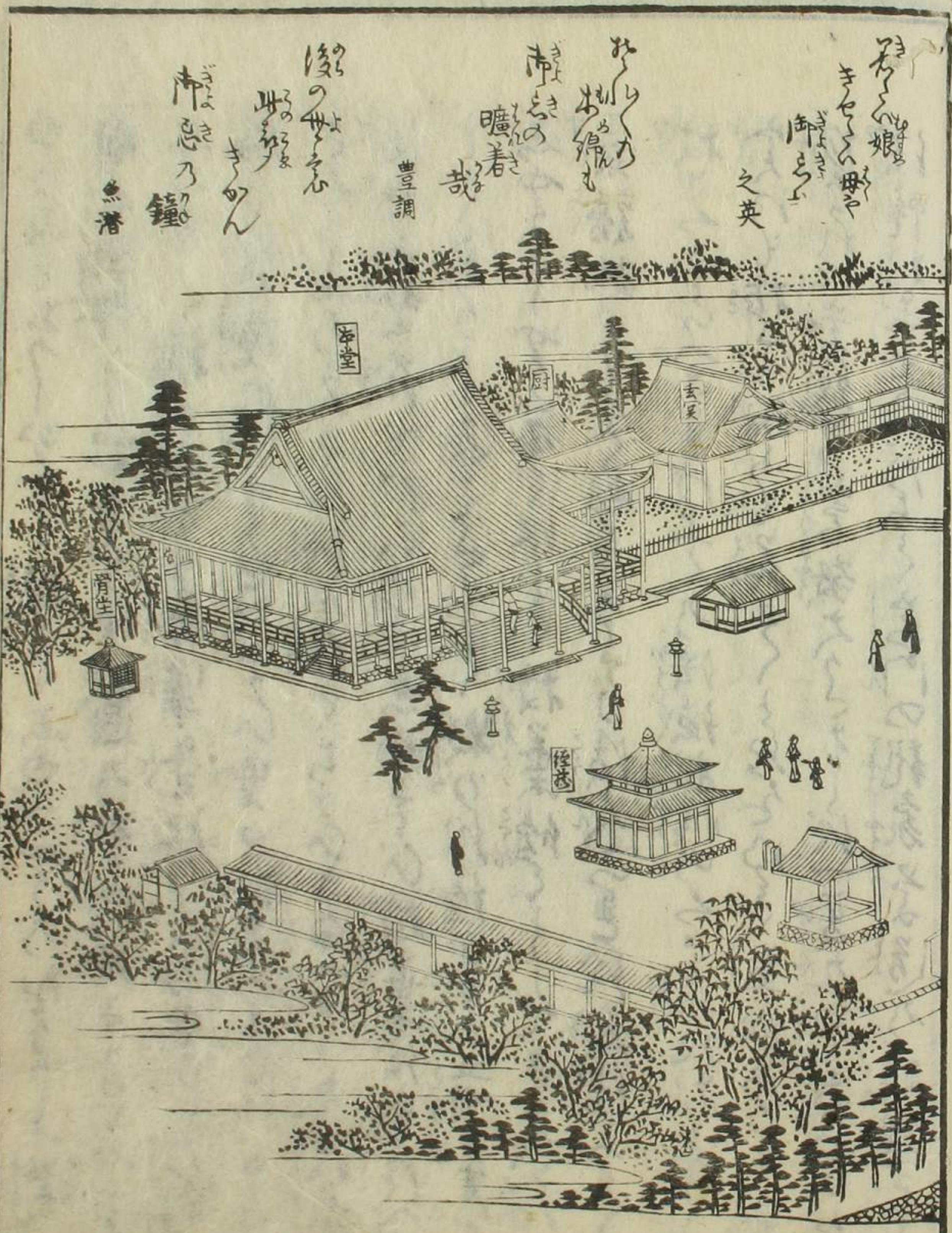
と^{シテ}御^{メシ}安^{スル}と幸^シの御^{メシ}と云^ハ白毫^{シロハス}佛^{ボク}舍^{サハ}利^リ八十^{ハシ}約^{ケタウ}て枝末^{ハシモ}合^{ハシモ}て二百八十^{ハシ}引^{ハシモ}あり

御^{メシ}嵌^{ハシマ}入^{ハシム}よ^ク七人立

梶取
總持寺

初春遊總持寺
祇林雨散後
杏遍行八黃
楊帶露新苔
深金跡沒樹
密鳥聲頻幾
歲投替客底
憐此地春

紀藩
吳清例



田の事とありかく諸事もあらずや乃をうへし者
固有田那トリカム十八箇乃梵刹ハさうもす
あぐらく福シムたゞ吾等はまたまくちゆうしたが
御く山境にまくセたまく曳ヤタキと云ひて
さくは乃えどんせふよくらひてゆう吉法善
後サハおもだせばお乃是ゑゆてびれ善あは生じて
一とあくべうがとくく教りは經より前ニキと
あゆうドアムアヒテくわ葉修くとくとそくへん
禪講郁トクマウラウラほんうきく名はる
杖さくまくまが上人ア法徳惟情のくわあたねが
室にむね樹わもとくとくをゆく草創あうし
切なればモソロキ教大くもじ一夏九旬あくごと
は時もよそうちたちく萬門の施家よほり禪講
御主ア苦行とくとくをゆるよくまく寢徳ア冥基
よりつまよんやんくとくとくをうぐ佛もアとんく
浴く宝月乃也深日くにあらううう
○付寶ア畫像除院か朱
又宿アうう教ノ法師御法ノラカ禁止御法ノ
百々本ノアリアリとくとくをくひ御年ノ
わりく僅りんあうりつともきのどんあうたまうもくう
おくざくふくたのくとくとくももんどうにやうういとひも
きのうともぐくわんやすとくことあくくろや
國君ア崇敬ノトロ懃浦こうくておれ皆あうなみ
形ノ脚景○おの外寺寔教予もあにへと屬
あへ

宗固の松
貴志村より下
きる山上にあり
勝園のまた深野家の老上田宗固ちりん
せんもまことこれ英雄にてかづら風流の道かも晴りしぞれ
とやこの名自株のとく手ばり一株の松と植ゑゆふ其
直標ひ賞ひては愛の樹なりとぞ

與諸子遊榮谷分題賦得冬嶺孤松詩意咏宗固松在葛嶺西梅村上

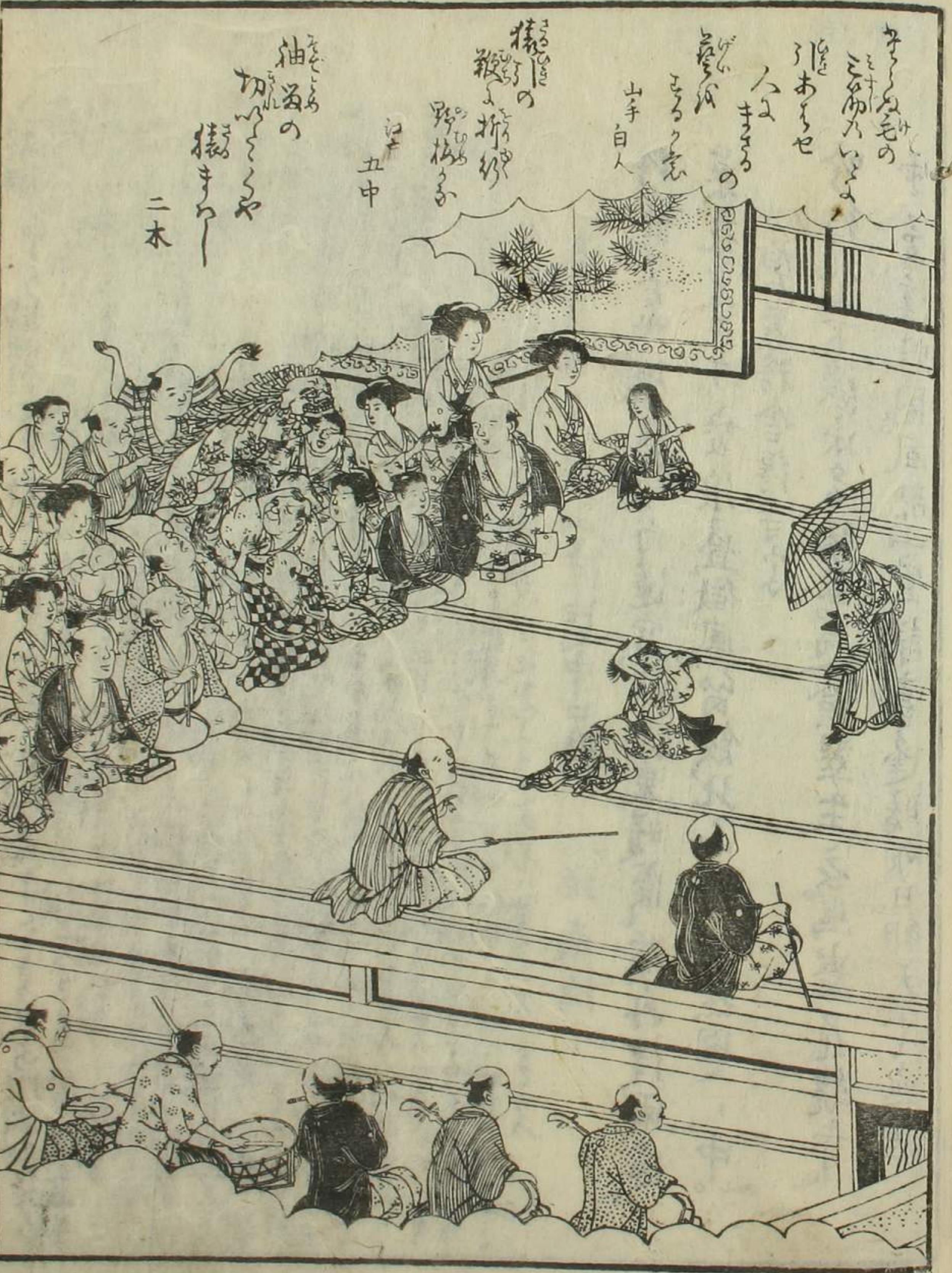
祇 南 海

矯々嶺頭樹。亭亭天外條。根兀在僻境。名獨自前朝。
偃蓋而常抱。貞操霜不凋。英雄亦陳跡。萬古望若堯。
北固山碧巒巖院
御附又
立
本
子
觀世音
作
不
事
事

矯く嶺頭樹。亭く天外條。根元在僻境。名獨自前朝。
偃蓋而嘗抱。負操霜不凋。英雄亦陳跡。萬古望若堯。
山瓊巖院相府より
奉る観世音作者不詳









○ 桃樹のむすり是日奉ての生する本にてとまこ異邦よ坐るととまうだらの沈休文にひ
王升公ムホの詩にみたるふ樹とつるりのくわの株をみのほりてへきりのにあゝれ又温公の
詩ふれ紅梅ともそぞうち支那にこの樹うさとくろはるよ近はる年中晴陽にありてたゞ雨とく
る月人の度うらあうづらとくろんくも本船のほんしとくろ樹の盆樹とあまきそのうべてたゞへ賞する
くやこそと吾邦の風土よお驚の樹あるればうもいわをねみのくつへう中華以東福
とくへば樹のとくすも山とくへ比高寺とくへ三井とくへうのたゞひく元氣うる然あ乃
中にもひたさくへりこのをみのれたゆがまくそくよとくれりあくびく深玉のすくねのを
たゞはくはくらうとくえうど蘆林とくつる家のくわぢかたわきともまやくしも花とくぐつにんあ
たゞはくはくらうとくえうど蘆林とくつる家のくわぢかたわきともまやくしも花とくぐつにんあ
くを正持が難躊躇よだもつくりとくすりその度ゆくをゆくへ疑とくるせよううつても唯
度ゆくの樹の実の酸てのみへえまされともあが正持がううとくもきとくえくとく進をりく
ねりへよ彼よへやくもくもくとくするまでうのうにりのよあづきとくふくとく人の性をうり
國雅とまうれり人の性あるよがせきま木もそくろがてくたれのうきよくごくとく
くらうてうの姥うつれ見原先生の没すれ彼をさうに仰く年候少一ほく無禁法堂と
いへばくひくけり其弟くとくなる本集のうちゆすうどの名へ號すうなりとそつ

春日遊碧巖山寺途中口號
送南歸

行吟芳竹地。遙訪向達官。野老乘晴石。溪舟得雨通。
菜花薰正午。麥浪疊微風。留飲北山下。宛然園中。
泊石安翁舍。得寺半山中。
吟行北山下。渡水多勝事。迴磴翠生衣。幽巖花繞寺。
雲深溪蝶園。風韻山禽議。喜逢晴明日。卯天雲無底。



岸村行官

八幡宮

本年正月の事

○祭る神三座

太神

本年正月の事

○祭る神三座

太神

例年毎年八月十五日○當社よりと由縁ある宮居ちうへ税官

に某たる家が小嘉慶應永永享の間平氏盛前豊前守基盛

中務丞盛直

本年正月の事

○祭る神三座

太神

本年正月の事

中務丞盛直本年正月の事

中務丞盛直

本年正月の事

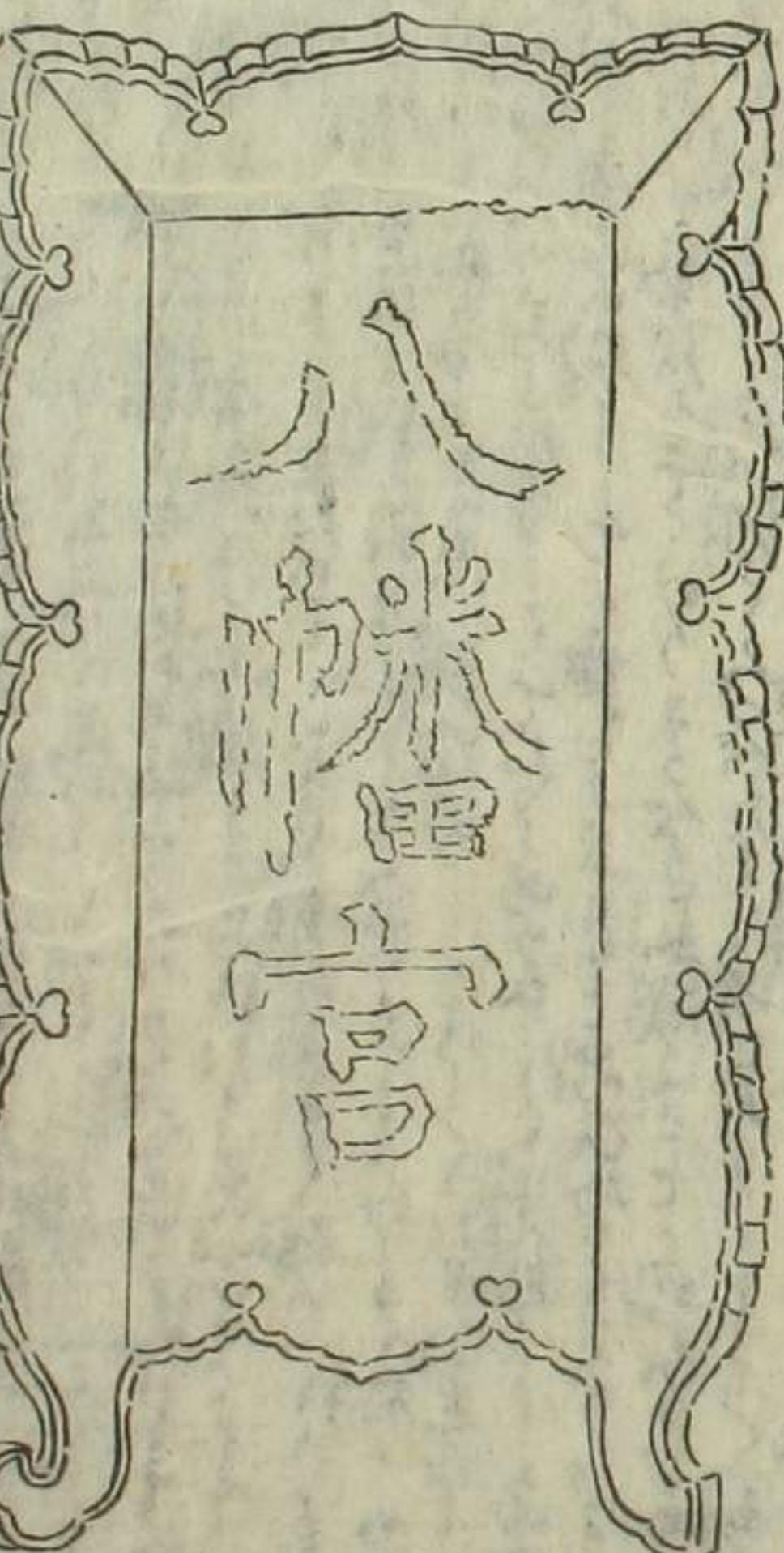
○祭る神三座

太神

本年正月の事

古額の圖

小野道風集



長三尺四寸五分
横二尺八寸五分

葛城山

さ
場の浦

の浦
子はよ鶴田へ民戸も達はばたて遠道より金とてあらう
まへ本紀の海乃さうひの浦の沖にりふもの日々へ、こうて海士人
あれ衆
行春のさうひのうの様たるあみこゑふる人やしくらん
知
家
〇櫻を集ひておる衆又櫻花紀行あはばなはるおうと遊あうこのちうたうに形りての浦あり
うちあうかうとととよつけ百川がれきれき

塙窟地藏尊



但吉神社さむよしじんじゃ
小嶋村こじまむら一村の産神うぶすなにて例たとみへ毎歳九月晦くわい
八幡宮はちまんぐう空そら崎さき村むら一村の產神うぶすなにて例たとみへ毎年九月十五日
稻荷大明神とうはらだいみょうじん猿さる崎さき村むら一村の產神うぶすなにて例たとみへ毎年九月十五日
勝手神かつてじん勝手かつて御ご神じん三座さんざい勝手神かつてじん御ご神じん三座さんざい勝手かつて御ご神じん三座さんざい

ひそかにねらひの裏面に碎くとてめ済みとてあまう國乃
ゆきのままで凡て佐よのまへあたへて内よりはれとせ
うすべ（名立庄内、オノル）あくらりかべく轟うと一ともくもぬ浦（アマツシマ）をす
鹽（アラシ）の轟（クラク）ふりとうれりだ日原氏（ヒタチシキ）のいとゆか遊（アマツシマ）
一奇元（アマツシマ）○松露（アラシ）鳥貝（アラシ）肉（アラシ）のいろをあへてづくく美味（アラシ）

初田十軒

底 南海
鳴啼山寺宿。過石龕邊。雲暗村相呼。浦舟。
本晴侵雨。宿枕聽清眠。鳥喜桔槔子。不勞灌諸田。
四十軒。家每自耕。と申す。其にとり数繕く。りて。りり。ある。そ
れぞのらむ。宿。くたよ。歸して。かく。一宿の舟。の。さき。は。故。
けりん。一日。泊。宿を。ほ。一民。ア。く。く。浪没して。一わと。と。あ。あ。ふ。の。れ。り。く。を
けりん。舟いも。ゆき。の。せよ。飄流。うん。は。せ。の。人。其。御。ゆ。て。家。く。た。畜。ひ

慶善先寺

志立へ立へ地よりぬるる——今立つてとゆで射れ由とくやこはりて回るをくつとくえん
又曰古也生者に内のみお畠楠木のは堂にて潛居セ——うる其名とくもつり○按又和
田の海の地名よして方キヤム大株はり下三ノ島と簡くアツヒナハ納モアシテ後るより
あるより生る名をうる今西村は又角野神の社あうけ井より名すりやあらんもれ
どもこくはる前の里とひきりてつゝに湾内の山とて曲るべ——やも又湾内むれりきり
櫻谷の山と西よりあうしきい由傍あう林をもうう——とせ興廢伴う
善光寺 日村小山を西よりあうまた田畠のあざみに登る寺櫻谷堂
山觀通寺 極樂寺也属ん
左くる空觀音 長さ尺八寸
山觀通寺 極樂寺也属ん
ちへりとまわるてゆくもまうう——寺見ゆうう——中

春日大明神

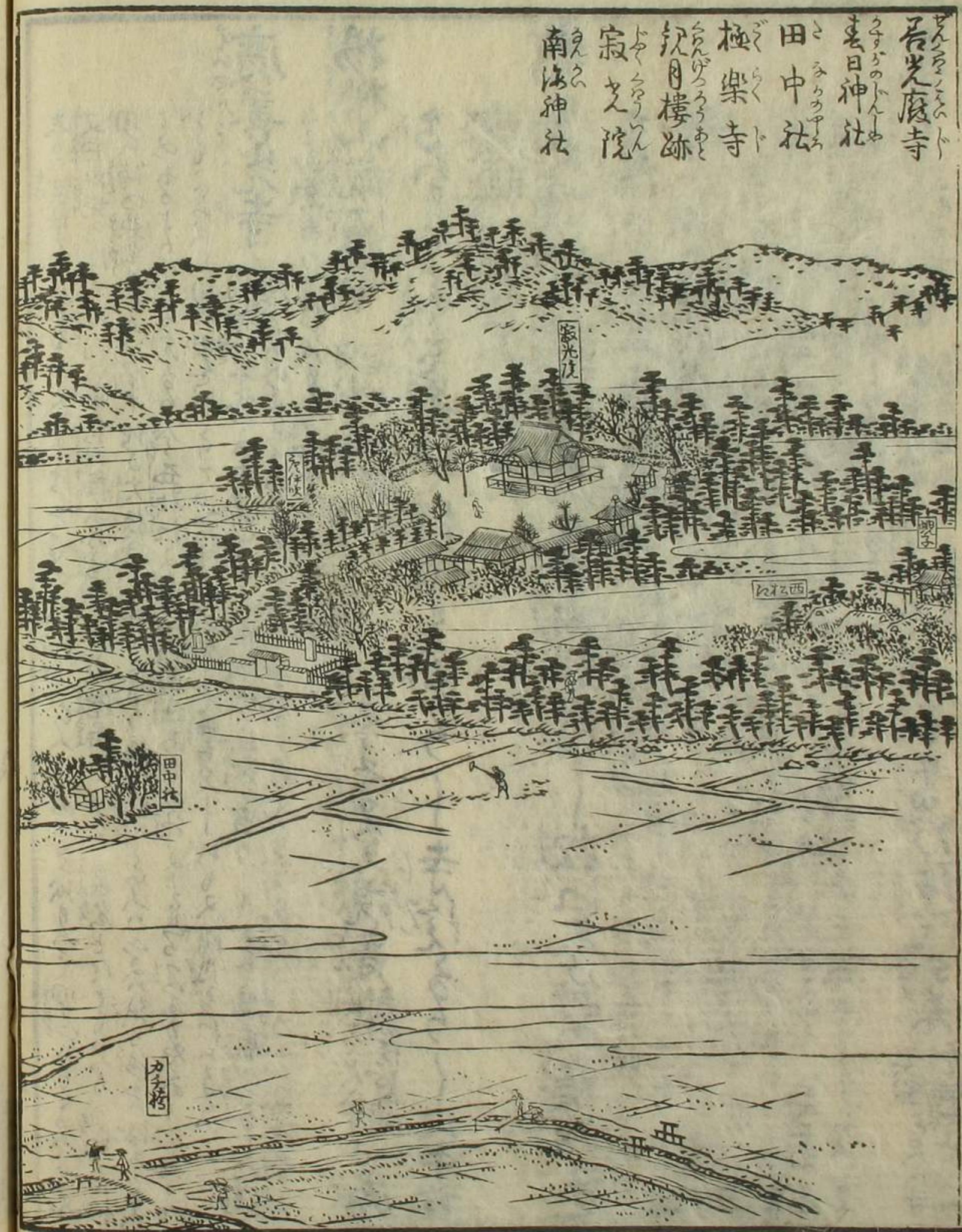
日太羽神 中ねに村 ちく袖
てむきぬま 一月朔日

あまう 燕のなか 林あら里くわく
称やうとくく 今庭内アシノマツ幸師叙迦牟尼

とひへり 墓ありと云ふ
御所はあらにまとう西
松坂城もお寺より屬れ

やんぢんあ
うぢ
ひよらへ

立像と尺八



○當寺の由良真圓寺法燈圓師の送水法空をわらるの元基に
ノモリとく算宗の洋刹うり一立後わ持るの昇ム明秀
上人も候也今のもん門に昇ムとひへとうち一圓入緬素帰
候のんはうざれりとま長二年法嗣の徒摶久明不却無角往
五度もうち教導上人ちに奉く中真一法も家流の開祖
久院相狀の面は遙よりうかんどん天台律宗
奉る阿弥陀か東妙見菩薩の像當院方丈
南畠山大同寺の別屋うりへが寛延二年九月勢利津城主藤
堂彦の家士何某うり人経仕の後難染して玄門にわるとうふが來
玉竹して中興の役とん

松江禪菴探題賦得僧家月

抵南海

銀蟾墜寶地。玉露浸金田。
射毫光直輪。籠彈影圓。

更深桂子落境寂よ魚懸。誠向秋懷曉虛空何ん處天
観月擣遺跡日村海翁の跡より是夕は皆歎ふの如き賞月遊金の如き

ふせ集
紀の海や浦風よまくはる國とも
南海神社
西松に村あり
多く神を玉彦命
奉る神名也と從四位上海神
佐佐木ひすのやへもと
例年毎歲十月十六日
當日餘のりもん接く

萬福寺

日村より浮舟も家
西本院寺に屬し

卷之三

三

當寺つゝへに真言宗からと云中古荒廢の後舊記を手に入れ
草創の本歴洋たゞに堂宇がよ右左一株あり枝葉四旁（俯伏）
まき牛のぐるりにて千載の歴めん名松とも云々う
八幡宮（本殿村）一座相殿き（一村の産木にて例のみ毎年八月

十九日。社へよし勝圓のとひはゆ家のほ中村若狭
さく長と年間に創建するもつらうとを

卷之三

物を効能
はねが多聞送り茶店より
持てて小ねどり茶へて
をうけて生れあら風味りともよ
生れのとてはくせん茶

卷之三

向
北
山

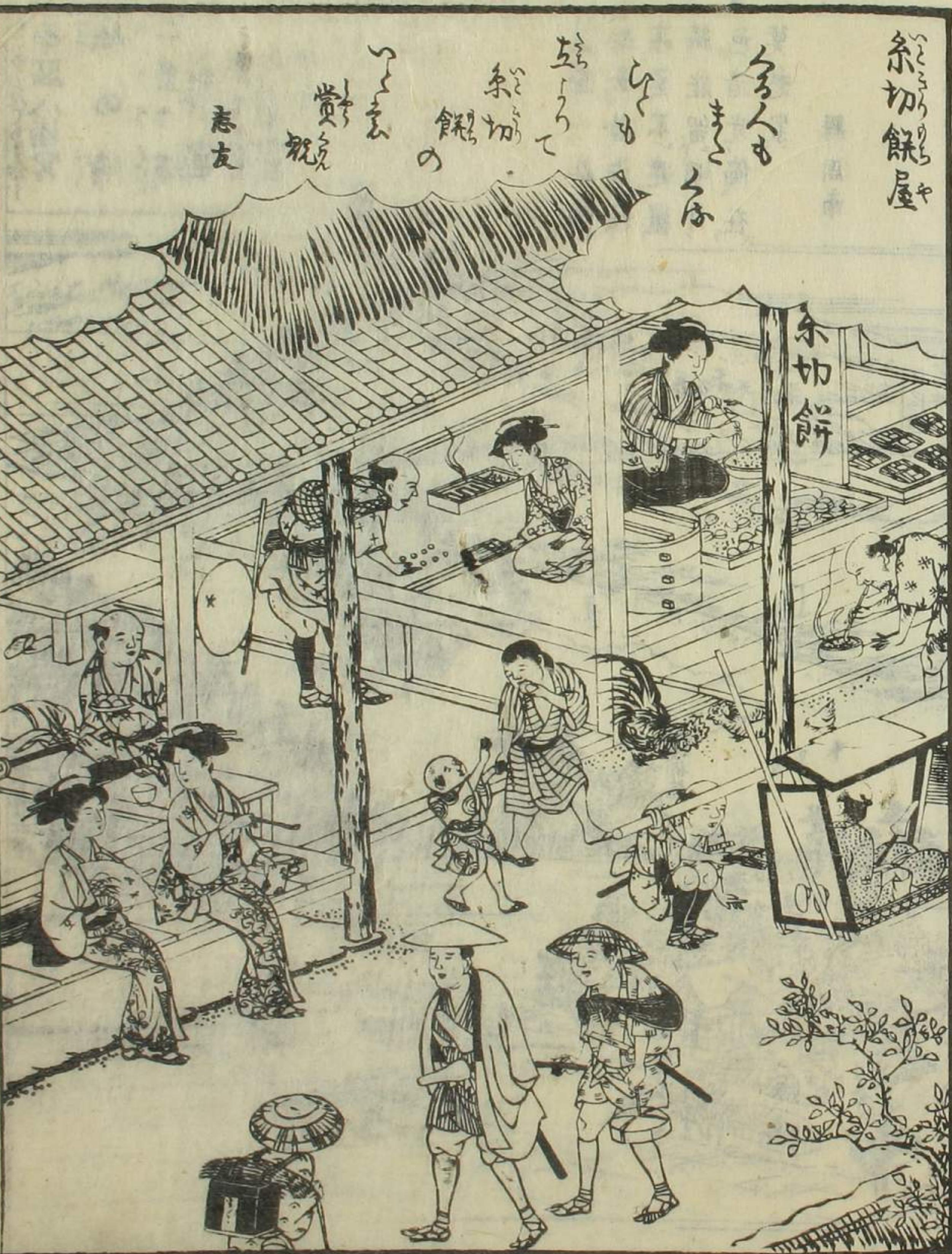
卷之二

いこの
う

浦

かくとそれへもとちりぬつてよしゆつねく浦をく漕ぐよもん送り又渡唐を教
の麦酒のまよひきうきあひの方をも同よそへう見えそくにどす

一
持
あ
つ
て
酒



方某
乃神手纏持太上故石浦回潛爲甲

柿本人麿

日
候之浦爾來依自浪又過不勝者雖爾絕多倍

二月於ホアヒミ岬中臣清麿の居宅を訪

後ノ少、博士原今珠真人

後より浦又はのうしとすもをみやせりくわがのあらまに

も素
あはれの日へ中半空見ゆ
あくまのゆきよる風の雨良

ま本
あらうかのうもんをあきらめ

日
ひのうめのあひにあがむつわくとく

日
つゆの浦ヌタヘニキテハ小ふくらむのおぬも今アムチカラ

本
仰るまのまわいあらや
波の浦よもよた浪のまよとよぐ

き
一
夜
ゆ
ば
の
う
れ
舟
も
さ
う
か
き
の
あ
く
ら
あ
る
室

わざひまほとれに引きて一派の浦人よそも
自らおどる

御内大臣より月清の御内大臣より

A vertical black and white woodblock-style illustration. On the left, a person's hands are shown scrubbing laundry in a large tub filled with water. The person is wearing a patterned garment. To the right of the tub, there are two vertical poles or beams. On the far right, there is vertical text, likely a title or caption, which appears to read "人也" (Renye) at the top and "洗女食" (Xinya Shik) below it.

This vertical strip contains three distinct scenes from a Japanese woodblock print. The top scene shows a woman in traditional courtly dress standing at a low tub, washing laundry. She holds a long wooden board across the tub. The middle scene depicts a person wearing a wide-brimmed hat and a patterned kimono, carrying a large woven basket balanced on their head. The bottom scene shows another person wearing a wide-brimmed hat and a patterned kimono, carrying a large, round object, possibly a drum or a barrel, balanced on their back. The style is characteristic of Edo-period book illustrations.

A vertical illustration depicting a scene from a Japanese book. At the top, the title '餃子の' (Gyoza no) is written in stylized characters. Below the title, a person wearing a traditional Japanese kimono and a wide-brimmed hat stands on the left. On the right, there is a low building with a tiled roof. In front of the building, a small fire or incense burner is placed on the ground, with smoke rising from it. The overall style is characteristic of traditional woodblock prints.

A vertical black and white woodblock-style illustration. At the top, stylized characters are written above a cloud-like border. Below this, a tiled roof is shown. In the center, a man in traditional Chinese attire stands at a doorway, looking out. He has a mustache and is wearing a wide-brimmed hat. The doorway is framed by a dark, textured wall on the left.

A vertical illustration depicting a scene from a traditional Chinese book. In the center, a man with a shaved head and a simple beard is shown from the waist up, wearing a light-colored robe. He is holding a round, shallow tray balanced on his right hand, which contains several small, round objects resembling eggs or fruits. Below him, another person's hands are visible, holding a white ceramic bowl. The background features a tiled roof with dark, curved ridges, suggesting an outdoor setting or a porch. The overall style is characteristic of woodblock prints used in classical literature.

This vertical illustration depicts a traditional Japanese architectural scene. At the top, a building's tiled roof is shown from a low angle. Below it, a thick wooden pillar stands prominently. To the right, a person wearing a dark, patterned kimono and a wide-brimmed hat is seen from behind, looking towards the building. The style is characteristic of Edo-period Japanese book illustrations.

A decorative border at the bottom of a page, consisting of a series of interlocking, stylized geometric shapes, possibly representing a chain or a repeating pattern of triangles and rectangles.





外龍の鏡

古鏡如明月
幾人照到今
不見古人面
唯見古人心

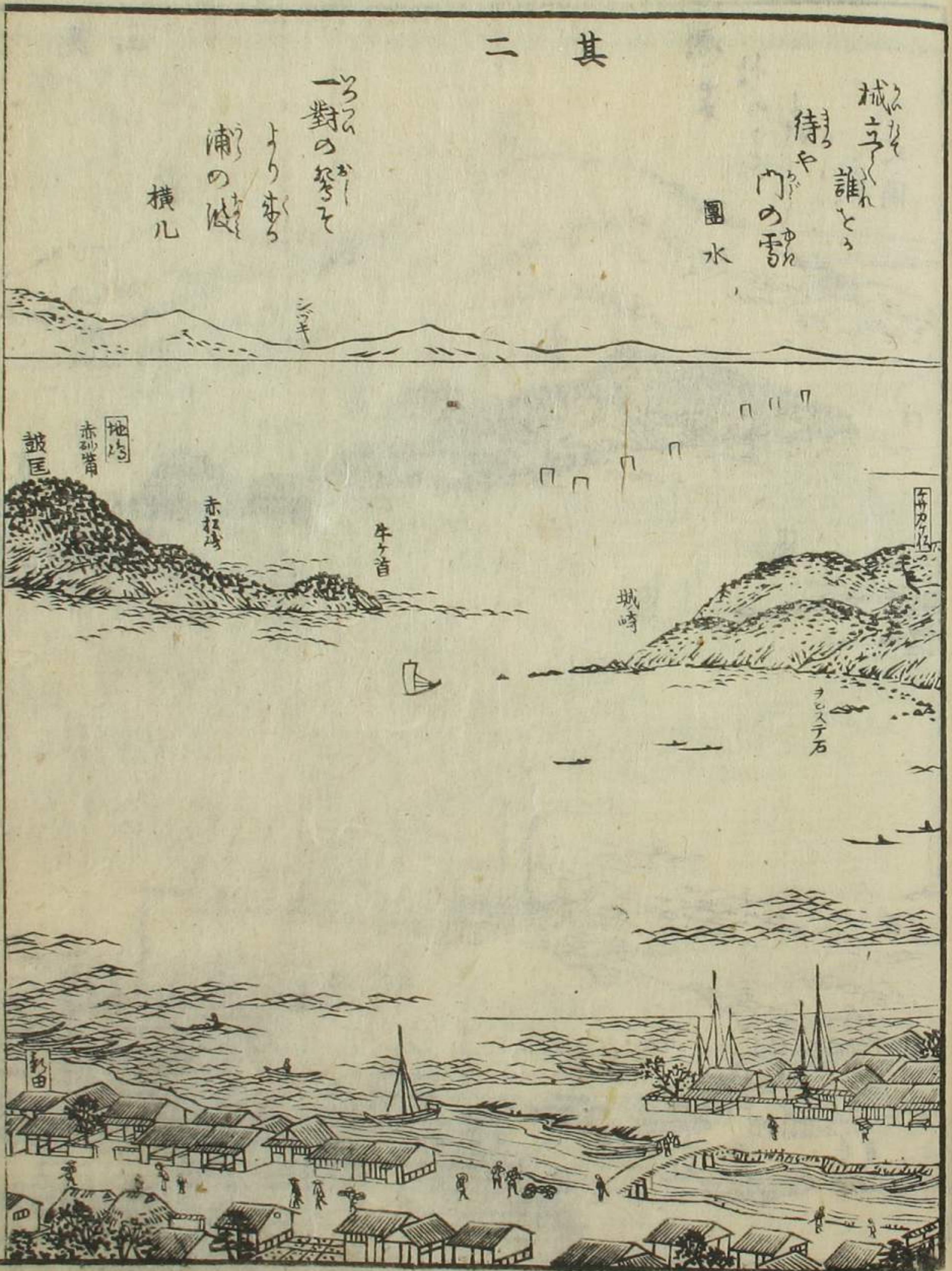
玉山秋儀



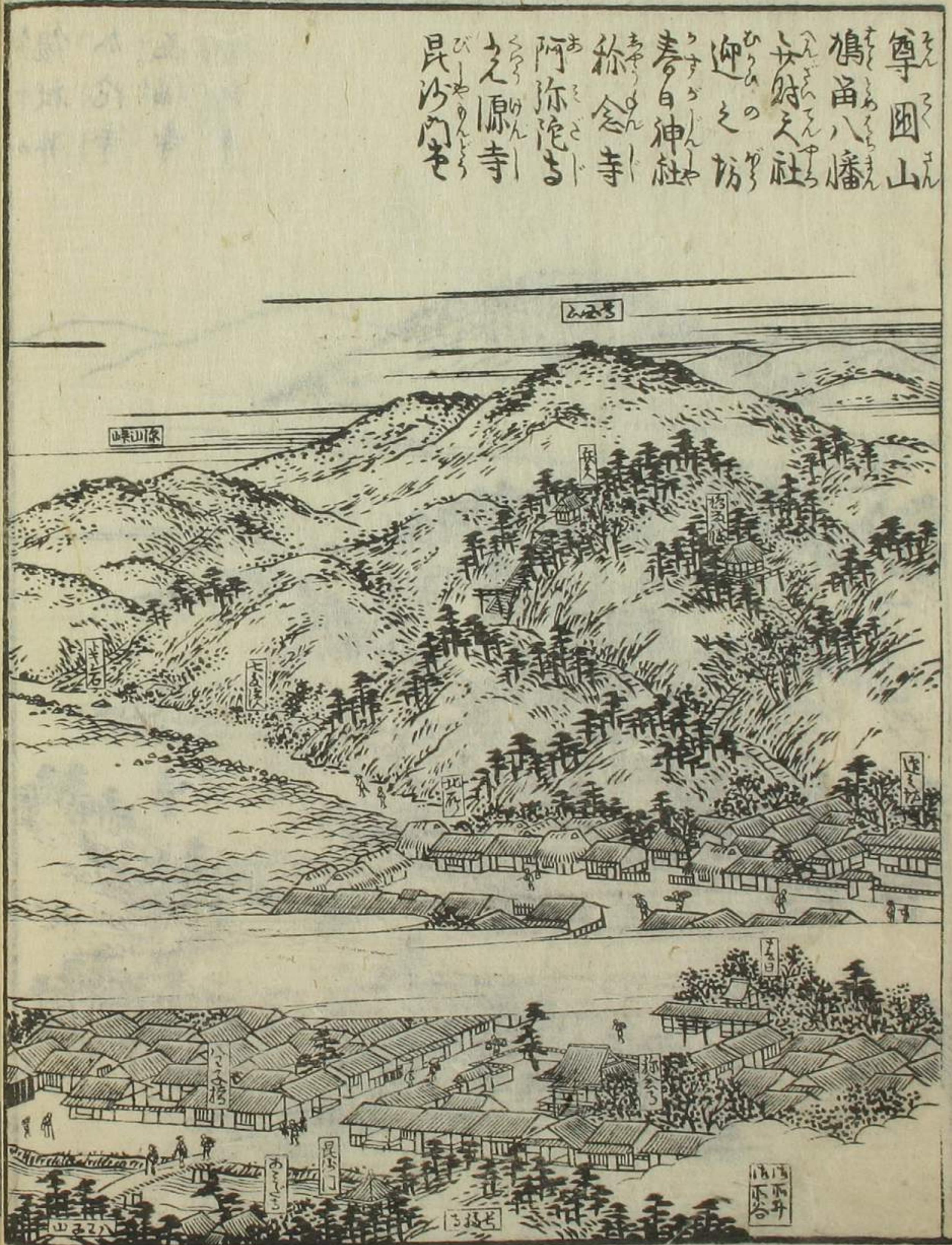
形見御鏡

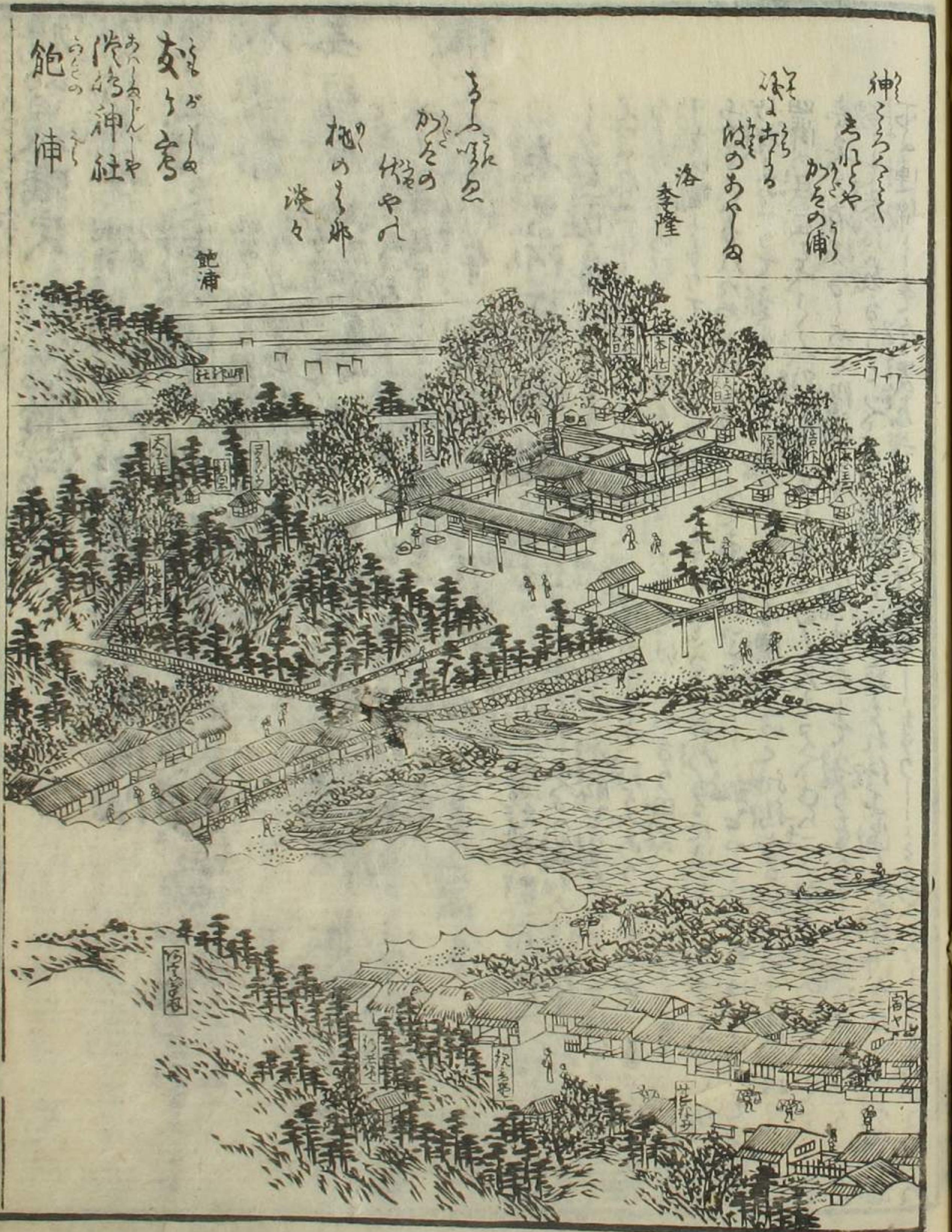
見の御鏡小圓たま 日外翁の鏡はるか

二 其



尊等圓山 鳩苗八幡
女神社之坊
春日神社
迎之
称念寺
阿弥陀寺
え原寺
艮山門を





鳥山留八 懐文

辨財天社

文
はるかに面のよきをとどけたり
うきよのよきをとどけたり
はるかにうきよのよきをとどけたり
そる像

尊國山之宿谷經場

江宿

宿谷經塲
日あよあう 風又樹経のり而て
寺也へ寺也もあう一而こくらへ
かを村へゆあう カムソんぢそく
本十弓也 獣屋也産

弁天社
燐内

卷之二

佛立ム常行寺

徳宗黄蘋派
ハ天皇家の慶ちあり」を藝術の民
達マリとぞよし附の松野あう改ふれ其
ノトド日付よりはちゆく食すエ
袖翁縣上人を中心の元

卷之三

奉る阿弥陀佛

アマアムもこのせが
アマアムもこのせが

兵船のふきに因まつて
少く沖よどみを出
て其中に傍依す文子
とお實しきものけし

本と之の間の往来は彼の手に於て
船と舟と船りあうけれどその度に
そむくあらぬ事は少くとも往々
たまう田舎へ舟をもつてすこ

于ちの懼とありて上下居候事もあらざるのれどに此の人民もとぞく侵入する
うちまへひあんじやとつあすをあられどもがくかどりよみよを去たあうて邊にし
竹林よつて御城もよきをあらうる壇上までおもがき除世のき像のねりはて
四隣の民屋とびく人殺す准りうるまゆけともスズムニシビキミのねりひとす
きうづきかわゆくやと渭下あさうに舟えうして茶うをりつゆほの波止うきよ
めりて添え被あらとくとも候がよと深とねまれ候よルキムキ申うやう田より出
ふよ連備とて今度方策と候に生れ候一まう一とくううとて左家より候

仰之堯

智異山 伊國賀門 駄屋家○延喜式云 伊國駄屋賀門ハ足を又元諸國駄屋邊植葉極多往來人得休息止
せ地の豊饒をうやうやしく泉の津、浦くよう江都へ運漕する海
跡の咽喉にて諸国舟の上下必ずとくにゆかうよどむので

市店あそびにねま村の家へ居あづ廢居の村ひそらを
うち肉と肩の家のあい縫室の顧問を生戸も其様たまこと
大波れじ理の隠口にももくもくせくもくもくと
二つの鳴あうけに着て粟嶋の次下に生戸南からぬ冲入を山
すと地崎とつ冲の崎の深戸を五の後油良八後と
者島の名前所謂れおき地のしゆと冲の崎の間と中後油良よ歛
とくまこ小さりに沿よ邊と牛の首の深戸と又
泉川底さくわんと近庫ちかくらようは底そこのせきとさるよ
春の内戸と経きと五の後ごのごとお後おごとくま
の詠よみれたり○名産○醤ひじき 海鹽かいじゆ とくま
は浦はらの海底こち一面いつに生なで海平かいへいと朝あさ浦うら人ひとの
とまつて立たつては浦はらの前上まへじょう則それをう其その先まへ下品げんととも船ふね上じょうもあざら
やどりをとくとく本ほん下品げんととも船ふね上じょうもあざら

の詞
詠れどねだる。
名産

○醯
海鹽レバノウ
アツテモウラ
○裙帶菜
くわせなめし
中下品
の葉下品と
とも前上と
だら

その名のと形の浦乃友も多き。其の時も亦、
本國自大臣
次年載
あくまでも形の浦はまださうぢやあらず。此の後
此三位経嗣

五葉
その名の如くの浦乃友多ちやく多すのまもあ
續千載
あくとも如くの浦乃友多ちやく多すのまもあ

龍虎山志

新後拾遺
友子もまたとめの浦にひびきあたはるまをれらん
益大納言為貞
日記
袖わくへりやありと凜々としてあらじる 信守れ
支本
うちのまほりと浦ちとてあらじるをなよ
民アハね家

卷之三

わくわくの浦ひうらせじゆくに宿のたまぬ年と
お送り草
かくやくは秋乃形見の浦すみうらをと中乃日暮

定家
凌鳥羽院御製

現在六帖
あくまそのかくえんの浦のうき風ふみ乃くアみてそまる
るをあわせ さあ すへ あととゆきものすきにーじう ひととことこー
鹽氣立雲心義子上て難玉生く一書六帖
一書六帖

源兼委

卷之三

卷之三

春日袖

篠山より
定本にてえもんと麻糸が入るよあつて吹き
神社 民家より地の古邊さつ
山燒の産木にてちへ是より東
の方山を腋にありノ山を山中
生城のおよけ地の手写にてて効用例文毎年四月六日

槐亭老人

槐亭老人



久も圓乃林へたどりて居たる宿主人
のあらわゆ仰へりとほる小か島のむかし
宿をうる家造みて居たゞる時より其よき
かゆゑに所はんのいふゆゑて眼を轉じて見られ
ておがむかへて終るまことにだひた
てと直あるまじき事とぞよつてん等をりてれ其のまこと
都度邑みじき

江南竹枝歌

武煙海

卽報歸期在月示。探得神龜。整金鉢。斜陽淡。嶼布帆。
影不是房舡。定產舡。木洲浦口十餘家。皆是舶商。半生在
房薩備豐之地。有數十年一還者。
山櫻元。閑海苔肥。雨々々々踏青時。山序潮來相撓。了。
不拜崖頭去婦祠。地多海苔。每歲三月三日潮落。都下士女來採珠貝。日暮潮來而罷。浦口有少彥祠。土俗相傳住吉太婦祠。

宗
祖

かみの島大明神
氣足姫命○延喜
伊國栗

紀ろ神四座○正殿少彦名神

相殿左方

右方

○文庫○御侍所廳舍()
堀之内中古西海子がの櫻とちうて社殿衆ど破
こゝに、其遠は尋く當時の國祖君()
るを免へる皇后御歯とてあ

難樓門

既 纪伊社

社頭海に清
くわべみずき
す幸長

の盤と常

川本
ハサウエイ
モーバン

社傳より湯社少彦名神トヨタリハ神皇靈モの御事ト
天壁微少モトヨトノ心性の恢復トヨトハ大治の密
モトホウシタガトクニモキレヒ富木大正貴命と力を參セ
ハタナヒテ但しけ葦原乃中津湖に造り堅也あひ立
圓くを近うて是と摩平げ正月に爲して立穀と樹シ先
草木に嘗て其が毒とモト療病の方と曰ひ更に多
數日其の定所携ひて禁煙の法を以て之を遂に止
めよアテ跡を去めなましに
右ノ神代の本末後人皇十五代トヨニ神功皇后自親ニ韓
を征シ凱旋モトケルが然王の謀反トヨロテ皇太子を
武内宿祢に殺シ本内水門トヨミ日高の野トヨタラ血を
なまらんとく官益以テ難波に向シ毛利廉頫アシル
とニ一陽候物く浪を揚げ漂蕩してか浦岐成生に投て
卿のをれに魚もうとくから初秋に懸て神詫あり一
進シテ御舟トヨトハ皇后執る艤子ノ上セナシ天神
地祇と作そくけ子のだらん方を尋セモ又モ答ハ
トヨトは申に投シテ其處とテテまく進シテめもす
テモ安ヒと漕はシテ遂に下テ船底也ナシタツノ神
おうど以本ノ危難免りシテ玉ノ御神トヨモモとモと
エテモ則山彦名令ハムトヨヘクヘナガラアムノ御神
宣助あらヒと云深く感シモモシキトハ御神醫
某ノ祖神トヨテ御子皇后女モ姫娘の御此モモと御
らセモナシヒテ御神免モの毒をモモ御神の後遂
赤白の帶下にアヒタル也モシテ御神免モ幸也おそれ
とテ款幣帛とトモテ是故モカ御願フモテモ靈驗
卿のをれに魚もうとくから初秋に懸て神詫あり一

則其もやへたはく業よをつてろとよに御不豫立よみ
平金ちくせなまくれのく皇后御悦喜たまうにやうて
韓國にて奴わんちくあひての様の宝奉納ましくて遂に
ウでくく皇太子に日あよ令一もしく人々を祭みて休て皇
統恙ちく奉びゆのゆ代は後ローラバフと神威を作みて家
致あくセモシケウ其のも十七代の帝仁徳天皇御法事んと
捕ちたまひてれ神宅あくく勤められたく立て
二月二日の日辰ト一宮うちより御殿に遷りすり皇后の神
靈とりて令セ給うありまゐる御神と合せ共餘二社乃
御神とも舟をももて一區四座と一本の地と多の地をもろ
てかた葉弓大明神と神社をもとしるそのやまかちとくの地と書記
諱後而至る世卿と見ゆるそまく御社の御神ハ海路の門所と傳
ひとあくくつらうる御神旅につく
やめ倉生病詔へりとあるを獸昆蟲乃穴處へん攘ひ
まくてばよま姉妹脊の守らすとくん女ひの昌とよづけ安胎
平産保護したまへとおもむきの御神像とぞくと書記
衆人作成歴代侯伯の寄附たまうとく咸和
御内多くつらうる御神旅につく
難めじ人の惣とまわぬ世とあくまみ神とつま
○その世と例と年二月二日九月九日女子難めうのむ戯あるまく
生古神乃皇后てぼうし子之命の御神像とびりて出仕よを
納たまうたまうとくまえをもとく直後仁徳天皇の御宇神宅
ひうてえ下婦女幼児の病苦ハ捨除のあゆれ空取物と難
めと製してあまと御神像にてまくまくと難れいの卷
今えう税うよ

大德五年夏六月
蒙古國主成吉思汗
詔

江戸の紹興ちう

故上社家の和歌ちう
禁厭移移の御名余ハ秋代より医業の祖林はて
ますて朝一散して免外もしく休りて文徳室、源氏、足利、安土、常陸
或御名服に生す頃是く向年十月山元院と号す院普薩名院と延喜寺
今下隱つる也彼とまとの内がへて傳とちしゆきぬ、
幻術家と混じる事の世よ人の間移と養らるゝ事後世あきと
をうふうどくにむかへて凡様の事うすりをみづら今下傳乃迷はうりとつて正とく
てくらの天とくらむことく已うひにあら葉ひと花よ葉うにひまするひびとあるがふ
製してまた考やくめのめりみすう美、兎たねけく後わ瓜者已其のみをよみを極て
脛れ軽速の後半を以て副幽だこの天との日てお婦のまつわり見りうくわざらひえ
なうわよ骨アヒムのぬきりさればとま拂わるのとくらうて法社にま廻さうすチテモ
とくらもこの天とのとくらうて其ひく、皇后は不豫ノとあるそばに御へ候たう玉人
とくられあたまうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
け迷みてようとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
をうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくら
○神寶八音瓊曲玉○神物皇后御鏡○口御太刀○綾之美物
○神樂大鼓以上ニ又ハサモト御用の御衣御冠
○大塔宮御鏡御衣御冠の事也御鏡の事也
○大塔宮御鏡御衣御冠の事也御鏡の事也

一對力臂參そよろあらへ

横
儿

能滿堂

○日不勤明王
弘法大師の俗名
○毘沙門天
役行基の俗名
○奉き虚空藏菩薩
小倉山の丘にあり
○棄迦陵神の山
小倉山の山頂に
○滿止堂
人ども

○曰不勤明王

山川之性亦

此
卷

者ありまじく徳經口うのみ神官を死にしめよ傷がふ
鳴きこ朝うしゆも主徳これにかづくぬとおもて名嫌がしむ。新田乃様宿うる、審
にのぞむとあるあくび形見神の象下に紀口地ぬ津み外れ被ひとみ
てとく三弓きり

友う勝景たや古くは神仙の出世放てて頃ひ
称うりの人もあるとあく常く役の角ひ口へ此に莫々う
遂ふ徳強道の糸木とたゞまう今たつてのくと空護二宝あ院
の配下室に來くはれとあくとあくて傾うたとか其を教
教くことあく地宮中多神をうち且形をつたて地宮沖溝
ひき火葬火を拂ふ勢をあくて壁へ左右八肩の人の面ある

ごと あら神のひ其の眉のうへに墨すと似すんじや 五用
乃さん浮出く先かをなき舟をすくい車の牛う首ふひて
上ふかの若き地よりは下ふちうとすとさへゆづらうが
船の周回すく二里ほど是うあんまち松義尉として若そ他の
難舟すくは風よ様よと名舟此の瓶とく一時く海氣に
海すくと風蠶だく不食すとぞに躊躇けり赤ね荷赤砂番
鼓匠金崎眠巣す諸務あうともも未奇絶くもつて観
盡く乃ち沖をすぐへ正向相距ると氣候一朝方是うな
れ激ひとき鼓怒一くひて湧をす一混漱うて渴みければ
漬匱たる立つむ恰も百千の迅雷ひを繋うとすうちる揖師
あくとその尾筒ふはきよまこと宣たすに舟既み彼岸ふふ
らんくして是處よもじに教てる懸のと波の向よたまうりの波
廟が原とく一斤の大石にて長さ二十仞もあるもん度まひせの

こううつうりあう半より下ひ石をすとまく山の字をなすと
端す皆乃どワづよがひの足を寧す一足すらば一歩をきみが
くりて行程す脚滑にすくは躊躇すくよどうすくがとほの
踏ぐ手の攀びともかく唯とづすづく進退かく斧と
刀詰う後あらまのとおとて木とくんやあもしの屠亦よがる
羊のと幾く要く耕りひりあひ母とじあら明安四そのがと
従く風くせの一辛へて其絶巒を極すが但見石面よゑひ
立竹林す殺生藏惡觀念巖序品崖間仰深地地歛池水の粒
家と形うやう是則圓穴のは 南魏公の令ふうてすみほほう
ちよふくよのと各こくあまう忍効とすくも寒風の
者翁すく一是とわくがふの若草をうとうて是より北畔
下に穴あり徑とくふニ尺ばかりあるが是とくと觀念窟と
人々ま猿猴の涂渓よかと抱まとがこなまく下りゆる



二丈の碑あつてさう遙見親王の筆にて多く其の勅をよ
と雅致もう五小の方にじては種々の役院のれづかたりの
い是が處の下もとよがしてあらそあも嘗てごく下雲
潭登りて泉にとづく試に杖をたてて大湯をきぐ
とあう窟をすく坤袖をとぎてて山を生む崖ふそよ
て道とうやう磨をまんまとあも外の方よ修くる所
ひふきすゆ地をまき半は崖よりの如槧穴とすんう
射臺をもう一とくつかひらすう飛うぐるてゆん崖の北
畔に聚あらがよんりのれお乃徒の所謂閑と称らるるこ
南ふ下ると三百七十丈巨石林と見て海中に立つふと
ぐれて岸より蔓者とぞくせうと十尋巖うともそ
たある穴あちやう止み荒木あらはよひくちに
あらうとあらはる呂の窟をとれお乃徒の林

今も庵庵として廢楠の下ひへる兵室にて水の面
に抜きたりて檻の戦のと向の海をむすび
じんを冠してさくらうどありて悉く名をもつてゆ
しんあがめ寺と称もすりの觀さんに比もうすみち
ままでじへて遙風とつる法師のこの地景をふくあれ
かくよかにあらはすより其名とよどもさんと巣集
山の下あり其巢上より下がり下より攀へて
すもさへた處にようそひまく安閑とてたのゆること
あるがる險阻か岩はさけまく安閑とてたのゆること
みの己う若く高尚に一爵禄をもつてはだせを難を
ぬぐふ遊くる徒のよきぎに似てうかうかと遙東北する
と二百歩にて女濱あり其石また寺も遙風壁よ
くすりばやあざらかみてよれどんおひき一景

すの名のつむじ下以れ五斗崖の石上松と生じてを夏に色とか
て大する石の御ふ風よしはまくあやすたらが海のやん崖
風ふ立てるうといとがらくじうかめ唐主の綿步障は
つべやりよく小の方よ遙するに其と立てばやたらほて
まじきわすり 牧の傷ありと 圓君龍種をくわでま人

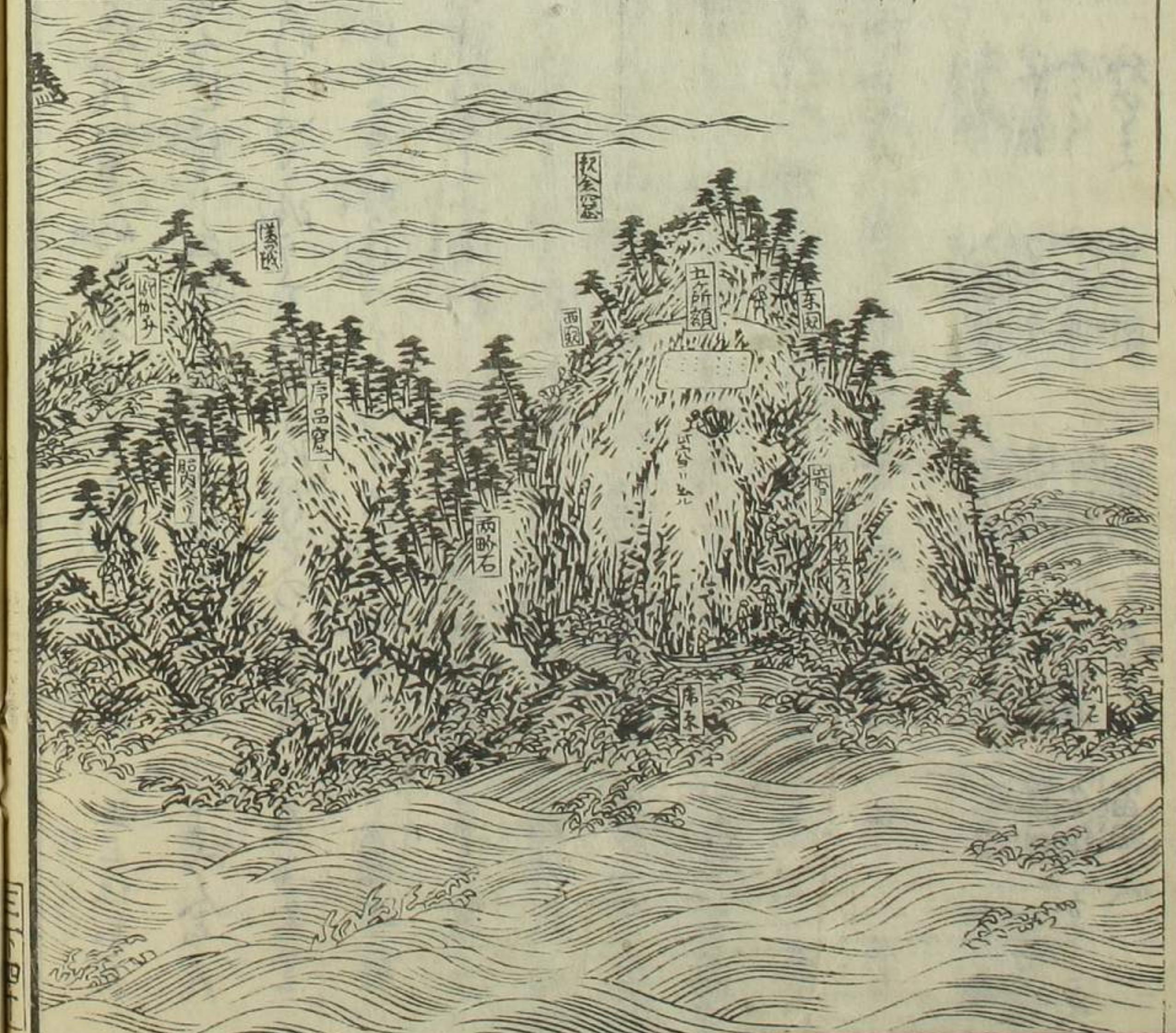
のふありうとうふして立ふ小ると十町あまり浦浦には
なむ深地池あり往百歩り行方の徒徑へつ是靈蛇の幽
宅にて笛の音ふまくとをにくひゑれ一うくとくかぢ
與命とせんじをくわくせよおこすの簞笥の具と拂
かるとふたご護摩場あり修強の徒がふかくはとせ
まのふすり碑ハ地のふすり友志の觀益やたまく
かづく正寺伊とまにとんじゆよ真ゆかたるや道より文より春川考の
度谷にとくあへてかまくまくらうほとくくりうもそのしだれもすりひくま
つひだりそのえまの妙を次下よりだくまくもそちど

道若子百島山木半布島西羊者松神阻歷如前六落物以尋一之鳳揖似許南東毒里浦者南李若下島也指駝後十有側入巨百北者而圈步界北卉得与少岑將狗懸二南播背汎尺倒于則靈五畔愛立似得南轉亂蛇神彥蔚軍吠崖里下携橐潮西石崖恢一十上其不臼道對倚雜潭島名劍之其腹而得諸多滿南噬樹々肇步下景可似鳳阿累塞壑隔神池虎偃其近爾山石則匯于碑乎裂許居悉櫟崎之出蹊谷一祠在攬然弇舟伽鮮少舟山崖題有者大破之名似山牟海欲所帶故良幽相然泣井淡壤可一腹曰餘為石裂故狀劍勢島中探注舟在位之顧扳島々如不越百熊妙地序簌状者得友似趨西者蛇湛過于土頃而緣之陷画生山二經法其品名島戟海接為穴為其此人應僕而西今僉餘所十而華始窟林曰鶴之游波淡海者潭間後傳接者上邊不聚卉以許上經正其立巢奇者底之獮鄉蛇有遷言不若者而存掌唯有步鶴序黑廣海怒山觀若皆由堆導虺候諸角暇漂若行有上松滿得啄品左才中濤有龍石良海想之臺栗仙神母龜詭碑蓋樹越滿而第右可移雨鶴于企峭使獮險所備洲得島上曝石記非數之越下一摸容巢此者巖人每隘蟠海合神周曉其峭耳以株名地稍窟索人于而若峩遊難狸防祀劍廻又奮立自其環也形得右而其巖極聳起裳其往巖南神之三如然巖高之一島出懸進高援所上矣若錯欲上乃之行功所百王款塊伽而可小中窟石神摩蔓葛也懸昔冠置涉是止所一皇謂許仙立萬井所上山最後將定肩葛也不時而若東為遇赦里后之步于而狀達居東突庫計墜而款上南可僧坐慕折友圓惡大云神其之仰起于無北起故可不見仄十下

不當而振響其畔正序余無置半之崎側波沖十地若春与或宅渝能比外大有中有所品蛇可而以湧眠居之島里島右一二爲役部進時圯壑口道冗書窟行措一下出巖西險在其樹曰所碧風雨角修從也傾爽撥晃徑也湖支手脚累波之南舟唯冲助萬寮友阻道所不能所也前雖就然爾親可字伽得不緣々向諸為人坤松島借發舟島多余先禦而有為王二大井及得漸乎如勝眉比位蔚神快瀾果志今行不膽八喙筆而天池面將進字者為異地地距氣地間遂如達友丘壑同射之斥獸書懸三蛇石窮且凹牆無一鳴島蒙島謂矣不動直行者得已極上力下飛劙雕天若為積席島沖島間甚起島十壑朝不落之覩勁得勤池作仰病觀島有牛首為故則以秘上此月余廢矣想古觀為等友視僕承踏一片奇絕首為上此日有余余履窟天雅念鳳字島先登綱以片為盜國所者半登百特志張潮見距窮如也使股背有俯可勢國所者半登百特志張潮見距窮如也余衆逡道無愛廣亦初禁已以則三在松翼水一海其物天公遊之古辟伏巡由底乃衰一殺極上可十沖崎勢擊片岸蘊引晴命傳以地足崖之磨可奇南生絕無以仍島志若雙翠遠斷知和島以強汗二而淵墨觀龍纖巔皴容其未砂雷震中也未至垂打丈也公惡先如足廣達眉震中也而天氣中宦事力踵在廣一西碑下李念誇成一之岸匡神里而迴浮吳色奇事崖步外及嘯北在左衡窟捷脚腳一望金島海懸可曰渝如賞羈窟

神の
沖の
波

四

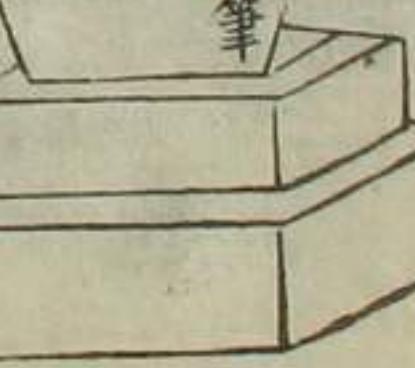


友嶋五所石碑之圖

觀念窟石碑



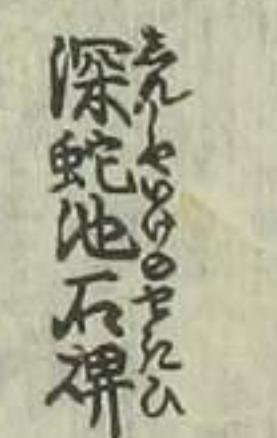
序品窟石碑



妙法蓮華經序品第一
熊野正隆書品親王道充御筆
玉奉行勝仙院晃玄



閻伽井石碑



寬文九乙酉雕
禁殺生懲惡
觀念窟
序品窟
閻伽井
深蛇池
劍池

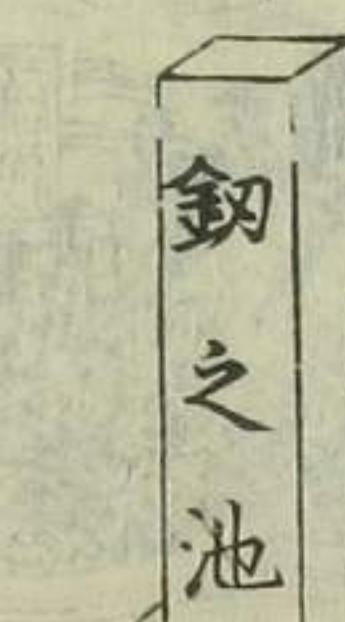
額

友嶋五所

友嶋

五所

劍之池石碑



二十一

仲の宮小名
神寫
八重たみ
飽等演
此浦のかきの漁戸とナリたまに海をみてあくべ四十尋
あくべ三十尋よねて西の尾向南へ大洋みて良漁
甚く瘦一さとて此海に產さうふり魚それてあに湯搗
巴くまく肉味殊更に良あり
もれ地の魚外別のうとてやうて就中棘鰐多
小鳴浦の漁人ほどいあくべがうすうた海也よ矣とた

生て竹山が
それを擇り入らぬあく
のみとたうまくうかの興味か
又幸野眼浦よりも生れ
ありまじめ細き
跡へ立たぬ
あらゆる
跡へ立たぬ
あらゆる

万葉あいきすすまよと
細引鳥海子哉見飽浦清荒儀見來吾
新拾送紀の國乃飽浦の大魚の太刀
一宇妙へ、腰へりきひを絶くとくとくも
日と夜つゝあやの宿乃太刀
かを村下川村人磨

此地五小川うち流風が吹きあぐ山頭の雜樹と人ひと
たま山勢に合ひて偃伏へ様と見て益々
のよし一麓よう十餘町下へ歸ふる東南の衆多峯
を袖そなへ小川を五小川ふとて朗らかに立て突せと
して寛波の上に立て相拱揖とうめいひ次の十光寺と

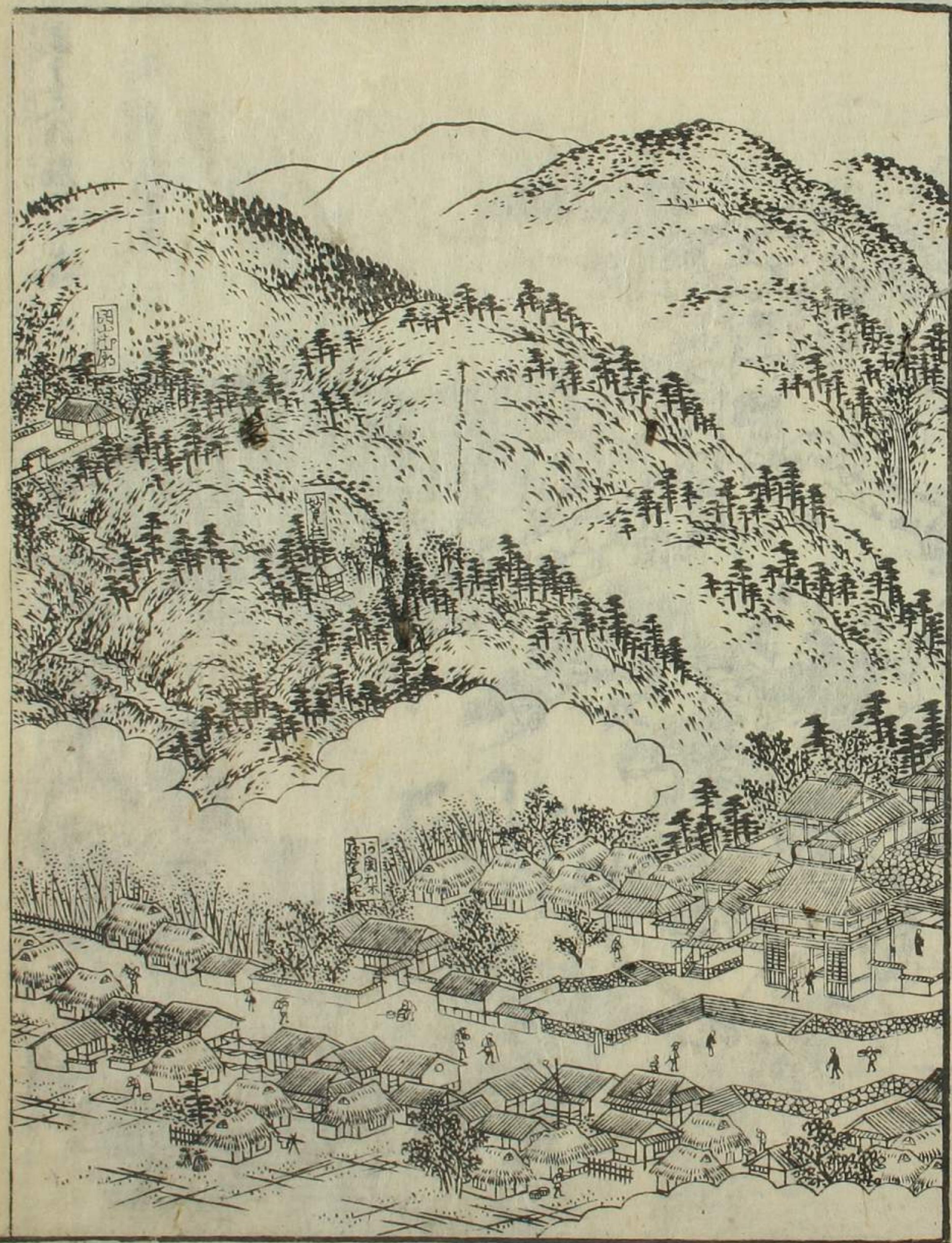
其地の方相接せんとて中節
とんの谷より摩耶武庫の諸山綿くとて波濤をうや東
に折くに纏約るとたゞあつて吹歛を浦ようこそゆのあ眼をおん
じて見ゆべり翠微よし大川八里ふとて一面の危山壁くとて
雪木埋しげど玉ねぐ由良乃門くる舟人のわきもよびだる
室屋室一をの勝景へ従長房うゆ地乃れもうちやま

上家集

或日面わうげあらと生れの御たりとあれどもうのふ中にはひとと称さうる者其
ひのうちなどりまきのゆゑもありやへりをそぞろのむかしんやだよひはる
金を集千載集の銀をまわせば深様きづるにこゑ由とひらがくも外ぐつゝう山地
をすみりちをうふはしけりをあくまくわくふたひなまくわくよりうこれ
さよめうちあら長伯があらやうがわざあらまくはるはるはるはるはるは
ととべー〇歴より人見きのむかしゆゑの表題に歴唐ありとの字とてうるの字
ナラ歴よちの字とから最ほみ日の字とよと達へるふ事一人さて其事とてうる
そとくようさんとたうじこよくあくとぬうらうのうとあうねへよの五経

大川村
たかはらむら
○ 卒尊圓光東漸慧成大師
さんごんあんこうとうせんえいせいだいしき

序自作



圖文書教化之圖

平等小月居

やうりや

山喜
谷半尼
集泉



け值遇たりとて考るれどもたゞく止みにを
あつた大際の如きあれ大際愛愍の御んかく念佛の如
益とすがゆあつての衆人甚多のあつて別れをとある
らセーベトやま永代爲生のあけ地よ形見ととし
とと上りてはづとづとくら様のあととくよと子親肖像
を刻むやあひとやくと一脉の者とぞと考と
りて其背剣はあらへ方ち鮮血をとすと本と牛糞ふね
あをとへ不ら深とつともわうとあらんと寄のとひと
あふそよのちゆと異口音不称名の故ゆううううと
推に微みの靈像と渴仰のけした餘淨口うとて大際ぬぬ
とほしにまわんで自う翁とゆく一極の名号とすと
彼餘材よりて大きい会珠とくらあらせとこよとあらひ
おなじ絹縫にあらずおまえあらく報恩をあらぐれられ

支當山念佛啓運の寺像は生昔後ち羽上皇院宣あつて大際深弘
寺延玉とくが矣從ちくて赦免の宣旨ひつゝ終の棲えニ
辛冬の初晴路よ向ひやあら土川より船よめられたぢらか破ぬふ
アシんとくわふく沙と風波あらうしき月に十月廿日出浦
ある油生濱よ船がてありとて不思議や渚の沙方ち浦橋の足
をさりゆきの裏相まのあらうとさん太際かとく等の
因縁成熟の端さくと松ノせ地名と油生が宿も号だらぬ
は浦の長よ阿闍梨孫大生とよりてありのあ
お詫び
固三宝不仏俗の心ありのやあれだけ奇物と圓
もひくとぞく宿方に支つく大際の道へあ家小屋請は
まう宗教教うりて大際も渠が心のけうごくふくせた
まひきとく澤苗ゆ一ナセーに遠近の送信すまに油
生の行園和菴家よと生家の浮院に來候まくけと誰り

紀伊國名所圖會

二編 海士那賀之部 仲秋發行

三編 伊都那賀之部
四編 有田日高之部
五編 年妻郡之部

刻 嗣

寛政八年八月官輸上淮
文化八年五月海宇發行



若山 高市志友編述
浪速 武内華亭刪輯
平安 西邸中和圖画
京師 渡邊玉壺齋書

三編卷上 浪華 市田治郎兵衛
平安 山崎庄九郎
井上治 兵衛
三編卷下 浪花 山崎庄九郎
二之卷 京師 井上治 兵衛
三之卷上 全 同
三之卷下 浪速 山崎庄九郎

紀伊國名所圖會卷之三下終

中
○
約昏は冬号にちむとひだを殊すて称名むことな
くとて終は四月廿十月下旬けと船牛へとてそんれに
うる人遺訓よもじい報恩のものけ地ふくらは造立しりの
靈像と安へすう不斷き人乞の近場とんけ地後へ群岳
周擁くふ月夕ふまみの少瓦堂へちの倉海氣満と
して潮音是居ふ安明の睡と覺たに清岸無垢の松男あら
○付定六字冬号 ○ 槩木大念珠
大川村
雇ふよあらけ地ふ面へくらがすふして居民の產業漁業おまくすだ併せ
尾張あらの田舎多くは浦とう歩をうこく頗るお花さう
○產物 ふかく松 槩馬同樹
章魚 鮮 鹿尾藻 櫻苔 魚
水底の魚人ねぐらの豚の膽とくろい竹舟盛ておこうこれと高橋面に蒸され
水底の魚人ねぐらの豚の膽とくろい竹舟盛て櫻苔と扱うと人足又一奇外也

江戸書林

須原屋 茂兵衛
前川 六左衛門

名古屋書林

永樂屋 東四郎

京都書林

小川 多左衛門

和歌山書林

鉢屋 安兵衛

大阪書林

糟屋 仁兵衛

勝尾屋 六兵衛

河内屋 太助

大日本國郡全圖 箱入 彩色摺 全二冊

此六百余州の全圖ハ、一少く經國の大業小志ある人をして地の理を知ら或ひ遊歴の客廻國順拜の人々勝槩古跡を探り神社佛閣うんと成る所不必用の書として比年東豁翁の撰小手本の志海内小公小也貰を計り累年の工夫をして終小大成セリあり其各國の郡縣村落山河小以てまで盡く著色をして分ち一覽する小易シテ其分明なる事恰も暗中小燭を擧ぐたまち小掌中を照らすと詳ふと乾坤を知事眼天下歴然と寔小こと一奇書ありかの仙家縮地の御も是ふと及き一まじ戸を出せり天下をもとよりて古語も嘗て此冊子の為小以ふある也

書肆

尾州名古屋本町通七丁目 江戸日本橋通本銀町二丁目

同

永樂屋 東四郎
出店

